



社会関係資本とのチームで ワクワクする学校に

船橋市立金杉台小学校校長 たけもり まさと 竹森 正人



1 「チーム学校」を構成するのは誰か

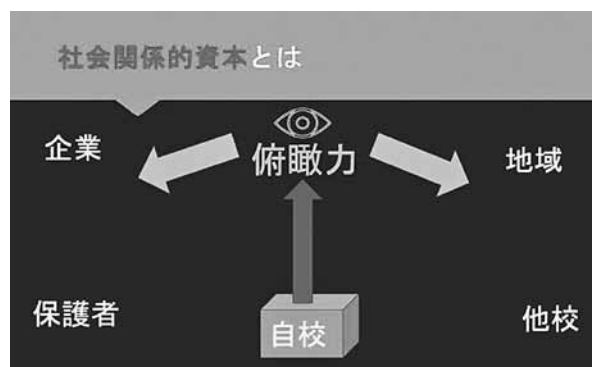
日本の若者の将来に対する意欲低下が危惧されている。日本財団「18歳意識調査（2024.4）」によると、「自分の国の将来についてどう思いますか」という質問に対し「良くなる」と肯定的な回答は15.3%（中国85.0%、イギリス24.6%）、「将来の夢を持っている」に肯定的な回答は60.1%（インド88.4%、韓国73.5%）といずれも調査6カ国中最下位という結果である。

その原因の一つは、学びのコミュニティが狭くなっていることだと私は考えている。本校も例外とは言えない。昭和46年の創立後、金杉台団地を中心に一時は1300人を超えた児童数も、現在はその5分の1、地域も高齢化している。近隣の金杉台中学校も令和4年度を最後に御滝中学校に統合された。

そんな環境だからこそ学校を、子供たちにとって将来がワクワクする場にしていきたい。それにはまず、子供たちの目の前にいる大人こそが今を生き生きと活躍している姿を見せていく。もっとも、子供たちにとって一番目の前にいる大人は教員なのだから。

「チーム学校」を構成するメンバーは、何も教員だけで完結しない。子供を取り巻く保護者・地域・そして企業が協働して子供たちの学びを支え、育てていく当事者であり、チームになれる。まず教員が、これらと主体的に繋がり、学校からもう少し高い視座で世の中を俯瞰し、社会と連携しながら学びをコーディネートしていく力をつける必要がある。

私はこれら学校を取り巻く社会的環境と関係性を、「社会関係資本」と捉えている。



本校は今年度からコミュニティ・スクールがスタートした。校外からの学校運営協議会委員は4名で構成する。少人数からのスタートではあるが、児童ホーム園長（地域）・高等学校校長（学校）・PTA会長（保護者）・IT企業社員（企業）と、社会関係資本の要となる人材でバランスよく構成できた。ITツールを使って学校のニーズと地域人材データをすり合わせていく「人材バンク」を作りはじめたところである。学校を取り巻く社会関係資本を繋げていく学校運営協議会委員はもちろん、彼らが繋げた人材もまた「チーム学校」のメンバーとなる。

2 学校と企業を繋げる

社会関係資本の一つである「企業との繋がり」。保護者や地域と比べて、繋がるには敷居が高いように思われるが、校長として以下のことを段階的に働きかけた。

(1)教員の社会関係資本を築く

文部科学省や教育委員会から紹介される協

力企業の情報等を得て、企業人材のもとへ足を運んだりリモートで対話をしたりする。校内の学びに生かせる情報を教員に共有し「種まき」をする。さらに以下のように企業との接点を段階的に設け、校内の「風通し」を良くしていった。

- ① NPO法人企業教育研究会から講師を招き、企業連携授業づくりの効果を事例を含めて紹介していただく
- ② 外部人材（映画監督）を講師に、一人一台端末を活用した映像表現実技研修を行う
- ③ 企業と共同計画した「1日企業体験プログラム」を本校教員が東京本社で受講する
- ④ 教員と企業のマッチングの機会を設け、人材及び技術提供を受ける

(2)社会関係資本チームとしての授業づくり

これまでも企業等には、一からお膳立てしてくれる「パッケージ型授業」を多く見かけた。内容もこなれていて子供たちも効率よく学ぶことができる良さはある。だが一方、教員は受け身になりがちである。

私は、教員と企業が育てたい子供の姿を共有し、学習内容について対話をし、協働的に学習設計し実践していくことが魅力ある授業づくりの大きな力になると考える。

本校の具体的な取組としては、5年社会科「情報」について、学年担任と日テレ報道局がリモート対話をしながら学習計画を進めた実践がある。教科書と睨めっこをしながら、教員は子供たちがおさえるべき基本的な知識を報道局のプロデューサーに要望した。プロデューサーもまた、ニュースを作る手順やスキル、注意点を教員に伝え、協働して学習計画を組み立てていった。

この学校と外部人材が共に授業づくりを行う関係こそが、まさに社会関係資本とともに創る「チーム学校」の関係である。面白かつ

たのは、メディア・リテラシーや知識習得の学びを日テレの元アナウンサーやプロデューサーが中心となり、ニュース映像づくりの実技は学級担任が中心となり学習活動を進めたことである。学級担任が映像制作の指導ができたのは、先に紹介した映画監督による職員実技研修において、インタビュー映像の撮り方を学んでいた経験も生かされたようだ。

(3)子供たちと社会関係資本が繋がる

子供たちはグループごとに制作した学校ニュース映像を日テレ報道局の方に見せながらアナウンスをした。最前線で活躍する現役のプロデューサーにたくさん褒めていただき、子供たちは大満足の様子であった。

この他にも本校の子供たちは、IT企業からドローンの操縦、舞台女優から卒業式で歌う歌の発声・表現の仕方等を教わった。それぞれのプロの方々からは自身の仕事観について語る時間も設けていただけた。

授業が終わると、授業者の周りに子供たちの人だかりができる。魅力ある大人と関わると子供たちの表情は変わる。また、子供たちの目の前にいる自分たちの担任の先生が、これらプロと関わり楽しい授業を実践していることから、魅力ある大人に感じられたのではないだろうか。

3 学校実態に合わせた社会関係資本の連携

教員が社会を広く俯瞰し、社会関係資本を身につけ、協働して授業をデザインし新たな学びを創造していく。保護者や地域人材は学校を取り巻く地域の規模に影響されることもあるが、企業人材についてはその制限はない。

学校の実態に合わせた社会関係資本で創る「チーム学校」によってワクワクする学びを実現することができる。そして子供たちにはそのワクワクした経験から将来ありたい姿を思い描けるようになって欲しい。



私の日々の実践（取組）

九十九里町立片貝小学校教頭 あお え 青江 ともふみ 智史



1 はじめに

本校は、九十九里浜のほぼ中央に位置し、自然に囲まれた温暖な気候の土地にある。学校の周りには、役場や公民館、郵便局、消防署等、町の中核施設が集中している。かつては、日本有数の「いわし」の水揚げ量を誇る片貝漁港を中心に半農半漁の町であったが、現在は自営業や会社員が多くなってきている。住民や保護者は、学校への思いも強く、何事も協力的である。明治6年に創設され、令和5年度、創立150周年記念式典を盛大に開催するなど、伝統ある小学校である。

2 私の日々の実践（取組）

教頭として2年目であり、力量が高いわけでもなく、特別に何かを行っているわけでもない。しかし、意識して取り組んでいることはあるので、紹介したい。

(1)職員からの相談への対応

職員室にいと「教頭先生、いいですかー。」と職員が声をかけてくる。その際に、気を付けていることは、やっていることを止め、目線を合わせて話を聴くことである。これは、私がお世話になった管理職が行っていて「忙しいのにしっかり話を聴いてくれる。」と嬉しかった経験からである。相談者は困っているから相談しているわけであり、丁寧に寄り添うことを大切にしている。また、相談内容に対して、なるべく、ティーチングではなくコーチングとなるようにしている。ここで大切なのは、相談者が相談しながら情報を整理することができるように促し、どう対処する

か自分で考えられるようにすることである。その促しを大切にしている。ただ、相談しやすい教頭かと言われるとそんなことはなく、職員からよく「忙しいのにすみません。」と言われる。気を遣わせてしまっている自分の行動を反省し、改善すべきだと考えている。

(2)気になる児童への対応

学校には様々な児童がいる。学級担任には、学級をまとめ良い方向に進めることと同時に、個に応じた指導が求められている。本校の職員は、児童に対して全力で指導・支援に取り組んでいるが、どうしても不安を感じたり悩みを感じたりする児童がいる。その児童をいかに支えるかが大切であると考えている。そのために、2つの取組を行っている。1つ目は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの効果的な活用である。来校日ではなく、事前に1日の計画と気になる児童の情報共有を行っている。そして、来校日の放課後には、教頭、学級担任、養護教諭、スクールカウンセラーで話し合いの時間を設け、現在の状況、今後の方針を確認している。2つ目は、不登校気味の児童に対して、校長、教頭、教務、養護教諭を中心として、全職員で見守る体制をとっていることである。児童が落ち着く環境の提供と共に、教室に戻ることができるように声かけを行っている。私自身としては、学校の中で話しやすい存在になることで、色々な悩みを抱えている児童が心を開き、力を充電し、学級へ戻れるように努めている。また常に学級担任と連携し、関わりをもたせることを意識している。

(3)悩みを抱えた保護者への対応

教頭の大きな仕事の1つとして、PTAの運営がある。現在、全国的にPTAのあり方について色々と議論が巻き起こっているが、必要の有無ではなく、私個人としては様々な保護者と関わりをもつことができる良い機会と捉えている。実際、PTA活動時はもちろんのこと、来校した際や電話等で、多くの保護者と話をする機会がある。その中には、学級担任には言いづらい内容について相談してくる保護者もいる。その際に気を付けていることは、3点である。①しっかりと話を聴き理解する姿勢を見せること、②一緒に課題を解決したいという姿勢を見せること、③職員批判にならないように話を進めること、である。いかに批判から肯定、前向きな話し合いへとシフトしていくのが重要と考えている。

(4)朝の登校の見守り

朝の登校中、児童の見守りを行っている。元気に挨拶をする児童もいれば、暗い表情をした児童もいる。昨日元気だったのに、今日は泣いている児童もいる。様々な児童がいる中、何気ない会話から学級や児童の様子を知ることができる。また、保護者から困っていることを相談されることもあり、素早い対応が可能となっている。その他にも、多くの地域の方々と顔を合わせることになる。その際、意識して取り組んでいることがある。それは、地域の方が車で通過する際も、立ち止まって挨拶を行うことである。着任当初は、挨拶を返してくれる方は多くなかった。しかし、続けていると、挨拶を返してくれる方が多くなった。また、本校児童も横断歩道を渡った際、停まってくれたドライバーに会釈をすることができる。「片貝小児童は、会釈ができてすごいよね。朝から本当に気持ち良くなる。」という声をいただくことも多く、私の密かな自慢である。

(5)新聞記事の共有

朝、新聞を読むことから私の1日がスタートする。そして、読んでもらいたい記事を職員に共有するようにしている。1学期、共有した内容は、【県政150周年 九十九里手つなぎイベント】【大津波地震情報発信について】【九十九里町 3小統合協議】【不祥事関係】【コラージュ川柳 ことば遊び】等、様々である。教育関係の情報はもちろんのこと、地域の情報については、意識的に共有するようにしている。地域と共にある学校を目指しているからである。また、学校とは関係のない情報も共有することがある。これは、学校社会という狭い世界から視野を広げてほしいという思いからである。誰かが、何かの記事に出会い、考える機会が1つでも設けられれば良いと考え、今後も続けていきたい。

(6)提出物への対応

各方面からの文書を確認し、指示に従い報告することが教頭の仕事の1つである。ここで意識していることは、【すぐにやる】ということである。たとえ、締切日が1か月後であっても、取り組める内容であればすぐに報告するようにしている。これは、報告忘れを防ぐことと同時に、突発的な事案に素早く対応できるようにするためである。学校現場では、突発的な事案が多く発生する。その時に余裕を持って対応することができる状態を保つことこそ、危機管理であると考えているからである。

3 おわりに

校長のリーダーシップの元、職員が協力して教育活動を行うことができおり、幸せな教頭だと感じている。自分の力量を上げる努力を続け、引き続き、より良い教育活動を進められるようにしていきたい。



県立柏井高等学校の実践の紹介

県立柏井高等学校教諭 ^{み かみ あきら}
三神 陽

1 はじめに

教務主任に任命されてから現在まで、公立高等学校入学者選抜の一本化や新学習指導要領の実施など公立高等学校にとっては変化の激しい時期であった。また、新型コロナウイルス感染症が与える影響も大きく、職員間の連携や共通理解がより一層重要な時期でもあった。様々な変化への対応が求められる中、他校の実践を知ることは本校の抱える課題を解決するに当たり非常に重要だった。特別な内容はないかもしれないが何かの助けになればと思い、教務主任を務めてから現在までの教務部の取組を中心に、本校の実践の一部を紹介させていただく。

2 柏井高校教務部の主な取組

(1) Microsoft Teamsの活用方法の整理

「GIGAスクール構想」の理念に基づき、千葉県県立学校でもICT環境の整備が急ピッチで進む中、BYODネットワークの授業での活用を促進するために、まずは教職員がその有用性を理解し共通理解のもと運用される必要がある。本校でも「Microsoft Teams」（以下Teams）の活用方法を教務部が主導して整理し、職員間及び職員・生徒間の情報共有の効率化を図っている。本校では、令和2年に新型コロナウイルス感染症による一斉臨時休業の対応として、「Google Classroom」の使用を教務部から提案し導入していたため、翌年に全職員・生徒へMicrosoft365のアカウントが付与され、利用するアプリケーションが

Teamsへ移行した際も、スムーズに業務に導入できた。

Teamsについて、本校では「職員だけが所属するチーム」と「職員と全校生徒が所属するチーム」の2チームのみ設置し、各分掌や学年、委員会等はそれぞれのチーム内のチャネルとして設置している（構成については図1を参照）。職員はすべてのチームに所属することになるので、担当外の分掌や学年間の連絡もチャネルの表示・非表示を切り替えるだけで確認することができる。本校は大職員室が無く、職員が各教科の準備室などに分散しているため担当外の分掌や学年の動きが共有されづらい環境にあったが、Teamsの活用によって投稿する側の負担が増えることなく情報が共有されるようになった。

Teamsを活用し情報を共有できるようになったことで、会議等の在り方も大きく変化した。本校では、毎日行っていた全職員による朝の打ち合わせを原則週1回（月曜のみ）に減らし、毎朝の連絡事項はTeamsで共有するようになった。月に1度の職員会議も資料は事前にファイルで共有できるようになり、印刷の必要がなくなったうえ、事前に資料に目を通すことができるようになったので会議もよりスムーズに進行するようになった。

連絡事項や資料の共有にTeamsを活用することで、職員も生徒もTeamsを確認することが習慣化し授業等でも活用しやすくなった。令和5年度入学生からは入学時に1人1台タブレットを購入してもらっているため、

Teamsを含むMicrosoft365を各授業で活用し始めている。今後も教務部が中心となって、より効果的な活用方法を検討し提案していく必要がある。

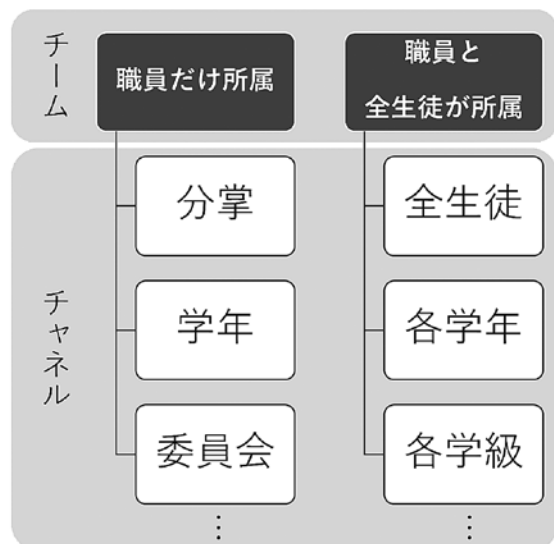


図1 チームとチャネルの構成イメージ

分掌、学年、委員会間の連絡にはチャネルを利用する。生徒が所属するチームも基本構成は同様に学級ごとのチャネルなどを設置する。授業で活用する場合は機能の違いがあるためクラスのチームを作成する。

(2)公立高等学校入学者選抜に関わる業務

本校では学校長を中心に教頭、各分掌及び学年主任で組織される入学者選抜検討委員会を設置し、生徒募集や入学者選抜に関わる業務の検討を行うが、年間を通じて教務部は中心的な役割を担っている。学校説明会の案内文書や学校紹介等を近隣5つの市内のすべての中学校へ発送するため、教務部が主導し4月から資料準備を行っている。中学校からの質問や個別の訪問希望があれば同封の返信用FAXで連絡していただく方法をとったことで、多忙な中学校の先生方へより柔軟な手段で本校の情報を提供できるようになった。夏季休業中の学校説明会も部活動体験・見学会と合わせ5日間開催し、説明内容は動画にまとめホームページにも掲載している。秋には入学者選抜等の説明会に併せて授業公開も実

施しており、様々な方法で本校について知っていただく機会を設定している。また、本校は「海外帰国生徒の特別入学者選抜」や「外国人の特別入学者選抜」を実施しているため入学者選抜に関わる問合わせも多岐にわたり、個別の相談に応じるのも教務部の重要な業務になる。2月の願書受付以降はそれまで以上にミスが許されない作業が続くため、願書の受付から選抜結果の発表までをまとめた実施細目は年間を通して慎重に検討を重ねる。令和6年度入学者選抜からは採点の仕組みが大きく変わったが、教務部を中心に職員が一丸となって研修等に取り組むことで大きな変化にも無事に対応することができた。



図2 教務部主導の研修会の様子

3 おわりに

柏井高校教務部の取組についてその一部を紹介させていただいたが、県立高校の教務部の業務に限ってもこの数年で書き切れないほど様々な変化があった（教育課程や学習評価の方法、成績処理校務支援システムの導入…）。教務主任としてその対応に迫られる中で感じたことは、分掌や時に学校の垣根も越えて知恵を出し合えば、何かしら解決の糸口をつかめるということだ。ここに掲載させていただいた本校の実践がどこかで課題解決の糸口になれば嬉しく思う。また、本校の取組についてより良いアイデアがあれば、是非連絡をいただきたい。



授業を核とした学年経営 —協働的な学びの手法を取り入れた 授業実践を通して—

八千代市立村上東中学校教諭 すずき 鈴木 たつひで 辰英



1 はじめに

中学校生活を過ごす中で、部活動や行事が生徒にとっての思い出になることが多い。ただ、学校生活の中心は『授業』である。子供の問題行動の背景を探ると、学業上の不適応が関係している場合が多々ある。私が学年主任を務めた学年の生徒は、小学校時代に授業崩壊が起きていた学年だった。後述でもあるが、彼らの問題行動の背景には、学習の困難さが大きく関わっている。だからこそ私は、学年主任として学年経営をしていく中で、授業を大切にしていくことに重きを置いた。さらに、学校全体でも取り組んでいた協働的な学びの手法を取り入れた授業実践を重視していくことで、子供同士をつなぎ、どの子も取り残さない取組をしていくことが、学年をよりよくしていくのではないかと考えた。

2 小学校時代の実態

小学校時代の彼らの様子について5・6年時の担任から話を聞いた。一番大変だったのは小学校4年時で、担任の指示が通らないため、普段の教室でも拡声器を使って話をするほどだったという。特に数名の男子生徒が中心となって、授業の抜け出しや、空き教室への侵入を繰り返していた。特に印象に残っていることとして、授業中に抜け出した際に、特別教室に侵入し、コンテナに入っていたライターを使い、遊んでいたという話があった。ただ、このような問題行動の背景には、学習の困難さが関係しているのではないかと考え

ていたようだ。そのため、少人数対応で配置されている職員に個別で対応してもらっていたが、その職員と合わず継続することができなかった。また、周りの生徒も問題行動を繰り返し起こすことに対し、嫌気がさし、授業中にに関わり合うこともなかった。問題行動を起こす生徒はクラス内で人間関係をうまく作れていないため、昼休みにクラスでまとまって遊ぶ場面でも、問題行動を起こす生徒同士が集まり遊んでいたということだった。

このように、学習の困難さも関係し、彼らが周りから浮いた存在となり、問題行動へとつながっていったように感じられる。

3 日々の実践について

(1)主体的に学ぶ

学習指導要領において、児童生徒に育成すべき資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。授業に苦手意識をもっている生徒にとって、授業は他人事であり、興味関心が薄い。まずは、どの授業においても生徒に興味関心を持たせ、主体的に取り組める授業づくりを意識した。

社会科の授業では、単元の初めに必ずクイズを行う。それは、単元の導入を楽しめるようにということだけではなく、そのクイズで出てきた内容をその後の授業で深めていく。生徒からすると、漫画やアニメの「伏線回収」のような感じだ。そのように毎時間楽しめるような単元計画を作ることで、学習が苦手な

生徒の興味関心を引き出すことができる。

理科で行う実験の授業では、必ず一人一役実験での役割が割り振られる。誰かが進めてくれる実験ではなく、みんなで進める実験という意識を持たせ、どの生徒も授業に関わりながら主体的に取り組めるようにした。

私の数学の授業では「自分でもできる」という意識づけを大事にしている。自分にとって解決可能な問題であり、問題が解けたら「嬉しい」という感覚が主体的に取り組むうえで欠かせない。だからこそ、導入でどのような問題を扱うのかは特に意識している。「どうやったらできるんだ」「前回と何が違うんだ」といった疑問を多くの生徒にもたせ、授業に向かう構えをつくっている。

(2)仲間と学ぶ

日々の授業の中で「仲間と学ぶ」ということを重要視している。特にこの学年を育てるうえで仲間との関係性を構築していくことは欠かせない。だからこそ、日々の授業を『仲間との関係性づくりの場』としていくことは学年職員の共通意識としていた。

保健体育の授業では、『男女共習』を大切にしている。男女差がありそうな競技でも、一緒に取り組む。特に、バレーの円陣パスでは、生活班を活用し、男女が協力し合う場を意図的につくった。このような活動をしていくことで、日常生活から男女で取り組むことを当たり前にした。

授業や集会、短学活などどの場面でも大切にしていることが『仲間の話を聴く』ということである。特に国語のスピーチの授業では、クラス全員の前で発表する。そこでは、全員が『話を聴いてくれる』という安心感のある雰囲気づくりを大事にしている。そして、スピーチをよく聴くことは、仲間のことを知ることであり、仲間への関心を高めることにも

つながった。

私がグループ学習などをやっているときに特に意識しているのは「仲間に疑問を訊くこと」と「訊かれたときにはすぐに対応すること」である。できる生徒はよく自分から進んで教えようとする。それはそれで、大事なのだが、まずは、できない生徒が自分から「ここどうやるの?」と仲間に訊けることの方が大事だ。教えてもらうのを待つのではなく、主体的に学習に向かわせる姿勢をつくる。そして、訊かれた生徒は、自分が解いている途中であっても、すぐに教える。ここで、自分を優先し待たせてしまうと、できない生徒ができていない生徒のことを「終わるまで待つ」という仕組みができてしまう。授業内でのこういうことの繰り返しが、学年全体に、自分のことだけでなく、周りのことも考える姿勢や、できない自分も受け入れてもらえる安心感のある雰囲気をつくった。

4 終わりに

小学校時代に問題行動を起こしていた生徒の中から、部活動の部長、学級委員長や専門委員会の委員長、体育祭で集団を統率するリーダーなど、リーダーとして周りの仲間と協力して取り組む者が出てきた。ほとんどの生徒が同じ小学校からの進学で、人間関係を変えにくい環境ではあったが、小学校時代周りに浮いていた生徒が、周りから認められるような活躍をしている。本人の「変わりたい」という意識が根底にあることはもちろんだが、学年職員全体が、子供同士をつなぎ、どの子も取り残さない取組をしてきた成果だと思う。

これからも日々の取組を大切に、生徒の成長を支えていきたい。



生きた教材となる献立作成

佐倉市立和田小学校栄養教諭 **もり 森** **みき 美貴**



1 はじめに

本校は、開校114年、児童数38名であり、小規模特認校として佐倉市内全域から児童を募集している。佐倉市では、全小中学校を単独調理場方式で運営しており、本校も食数約60食ではあるが、校内に給食調理室がある。

2 給食を生きた教材として活用

栄養教諭の職務として、「食に関する指導」と「学校給食の管理」がある。この2つを一緒に行うことで、学校給食を生きた教材として活用し、効果的に食に関する指導ができると感じている。栄養バランスや旬、行事食、郷土料理について、給食を通して学習できるように、献立を作成している。本校では、毎日「ランチタイムズ」を発行し、児童はもちろん、教職員にも献立のねらいを伝えるようにしている。

また、食に関する指導全体計画を作成する際には、各教科との関連についても明記している。給食を授業の導入場面や主教材として活用したり、授業で学習したことを給食で確認したりすることで、楽しみながら「食」だけでなく「教科」の関心も高めることができるのではないかと考えた。今回は、給食から授業への活用ではなく、授業で学習したことを給食で確認した取組について紹介したい。

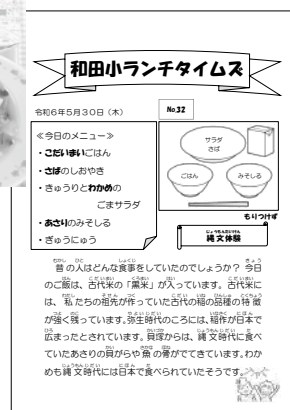
3 実践内容

(1)縄文体験

6年生社会「縄文のむらから古墳のくにへ」

の授業の中で、県教育庁教育振興部文化財課と市魅力推進部文化課の方をお招きして、火起こしや縄文土器について学習する「縄文体験」を行っている。当日の献立は、縄文時代を意識した献立を作成した。

- 古代米ご飯…古代の稲の品種の特徴が強く残っている黒米を使用
- さばの塩焼き…貝塚からひらめ、まぐろ、かつお、さばなど魚の骨が出土
- きゅうりとわかめのごまサラダ
…青森県の亀ヶ岡遺跡からわかめが出土
- あさりのみそ汁…貝塚からあさりやしじみ、はまぐりなどの貝がら出土



(2)田んぼの学習

4・5年生が総合的な学習の時間に「田んぼの学習」を行っている。地域の方の協力を得て、田植え、草取り、稲刈りを学校近くの田んぼで行っている。田んぼの学習の日には、ご飯の献立にし、「ランチタイムズ」で米の大切さや育てる苦労などを伝えている。4年生以上は、実体験したことを給食の時間に食

べながら思い出すことで、いつもより味わい、残さず食べようとする姿がみられた。また、収穫したお米は給食でも提供している。

(3)国語・音楽・その他

様々な物語や説明文の中には、食べ物や料理が登場することも多い。直接的に食に関する指導と結びつかなくても、食べ物や料理に対する関心を高め、同時に教科の目標を達成する手助けとなると考えている。

①2年生国語「さけが大きくなるまで」

3年生国語「うめぼしのはたらき」

鮭や梅干しを使った献立を提供し、「ランチタイムズ」では、教科書の内容を抜粋して知らせた。また、「さけが大きくなるまで」では、給食の時間に、鮭の実物大パネルを児童に見せて、鮭の大きさを実感させた。

今年度、教科書が新しくなり6年生国語で「津田梅子」の伝記が掲載された。津田梅子の父、津田仙は佐倉藩出身であり、日本に西洋野菜を広めた人物として「佐倉学」でも取り上げられている。今後、津田梅子、津田仙に関連した献立も提供していきたい。

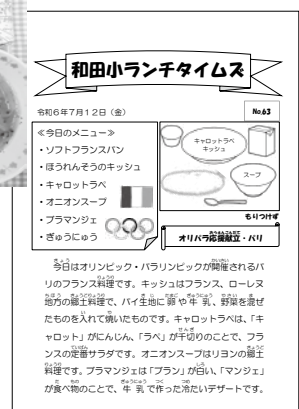
②5年生音楽「こいのぼり」

給食では、行事や旬を意識して献立作成を行っている。その時期や季節に合った曲を音楽で学習していることも多い。行事に関連した給食の日には、運営・放送委員会の協力を得て、その時節に合わせて選んだ曲をお昼の放送で流してもらっている。こどもの日献立では、2種類の「こいのぼり」を流した。他にも、「茶つみ」「たなばたさま」「うれしいひなまつり」や、魚料理を提供する日に「おさかな天国」を流している。

③その他（世界の料理）

今年の夏に、フランスのパリでオリンピック・パラリンピックが開催された。応援献

立として、フランスの料理の提供を考えている時に、3年生道徳「ライラックのさく庭で」の中に、キッシュやガレットなどフランスの家庭料理が登場することを知った。そこで、給食では、オリンピック・パラリンピック応援献立として、キッシュを提供した。3年生の児童は、キッシュが出たことを喜んでいた。



世界の料理を提供する際は、教科書でどのような国を取り扱っているかも参考にしている。昨年度2月には、6年生社会「日本とつながりの深い国々」で登場するアメリカ、中国、韓国、サウジアラビアの料理を提供した。児童は、どのような料理なのか当日の献立を楽しみにしていた。

4 おわりに

給食が生きた教材となるためには、おいしい・魅力的な給食を欠かすことができない。調理員と力を合わせて、安全でおいしい給食作りをしていきたい。そして、今後も担任や職員の協力を得ながら全体計画を作成し、献立作成に生かしていきたい。楽しい給食の時間が、児童の生きる力の育成につながることを願っている。



チームを意識した 事務職員としてのかわり

流山市立おおぐろの森中学校副主査 ねもと 根本 はやと 隼人



平成27年12月21日の中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」が、チーム学校といわれるようになった始まりと記憶している。

「この答申が出る前の学校は、チームではなかったのか？」

こんな意地悪を言う仲間がいたが、チームとは何か考えるよい機会になった。

●目標を共有すること

●それぞれに役割があること

この2つが、チームであるために不可欠なことだと考える。野球でいえば、勝つためにピッチャー、キャッチャーなど、それぞれがその役割を果たすこと。学校でいえば、校長の経営理念、学校教育目標を達成するために職種ごとの専門性を発揮することであろう。

では、事務職員の専門性とは何か。「事務職員は、事務をつかさどり（学校教育法第37条14号）、学校組織における唯一の総務・財務等に通じる専門職」といわれるとおり、経営資源である「ひと」「もの」「かね」「情報」すべてにおいて他の職種とは違った視点をもっている。特に「かね」は、事務職員固有の業務である。学校内外にある資源の発見やその活用方法など、事務職員だからこそできることは多くあると考える。

一方で、事務職員は原則1校に一人だけである。事務職員の経験等によって、学校ごとの事務機能に差が生じることは望ましくない。そこで、共同実施（共同学校事務室）というしくみがある。複数の学校で連携し、学校事務を効率的に行うこのしくみを、ぜひ活用してほしい。

チーム学校には、教員の負担軽減（子供と向き合う時間の確保）も期待されている。だからといって、これまで教員が担っていた仕

事を事務職員が担えばよいかという違う。「餅は餅屋」というが、職種ごとの専門性を明確にしたうえで、この仕事はどの職種が担ったほうが良いか、仕分ける必要がある。

最後に、自分の実践をいくつか紹介する。

1 学校ホームページ

日中に作業する時間を確保しやすい事務職員が関わることで、迅速な更新を行えた。事務職員にとっても、学校の様子が以前より把握できるようになり、気づきにつながった。

2 就学援助

保護者は学級担任に金銭面の相談をしにくいという課題に対して、事務職員が申請や問い合わせの窓口になることで改善を図った。

3 転出入

学級担任等への声かけや関係書類の集約、学校とのやりとりなど、事務職員が進捗を管理することで、より確実な手続きになった。

4 教科書

事務職員が教育委員会への報告や学校にある教科書の管理を担当し、教員が生徒への配付や回収などを行うというように役割を分担したことで、得意分野を生かす分業体制が確立できた。

すでに担っている業務についても「事務職員の専門性」「事務職員だからこそ」という視点で関わりを見直すことをお勧めしたい。

答申が出てからまもなく9年。事務職員の実践には、どのような成果があったのか。好事例を共有し、広まることを期待する。



「毎日の生活と健康」 ～自分の体調を伝えてみよう～

とう か ぎ
市川市立稲荷木小学校養護教諭

いしはら あき こ
石原 晶子

1 はじめに

本校は創立68年目を迎え、「やさしく・かしこく・たくましく」を学校教育目標とし、主体性を育てる教育を推進している。

市内小学校で唯一の「きこえの教室」があり、授業の情報保障のため、通級児童に担当教諭が、決められた時間に付き添っている。

2 毎日の生活と健康

「命や健康であることを大切にする子」ををめざす児童像に掲げ、学校保健活動に取り組んでいる。今回は、3年「毎日の生活と健康」の保健指導の実践を紹介する。

学習のめあてを「どうしたら、毎日健康にすごせるのか考えよう。」とした。

パワーポイントのスライドを大型掲示装置に写し、児童に「健康とは何か？」を考えさせた。健康とは、「こころ」や「からだ」の調子が良いこととした。

次に、児童の発表から、健康に過ごすために大切なことを3つにまとめていった。

- ①生活リズムを整える。
- ②からだをせいけつにする。
- ③生活かんきょうを整える。



図1「手洗い」

3 自分の体調を伝えてみよう

健康観察で自分の体調を伝えているが、その理由も考えて、隣同士で伝え合ってみる。

「今日の具合はどうですか?」「昨日より元気です。よく寝たからです。」等々。

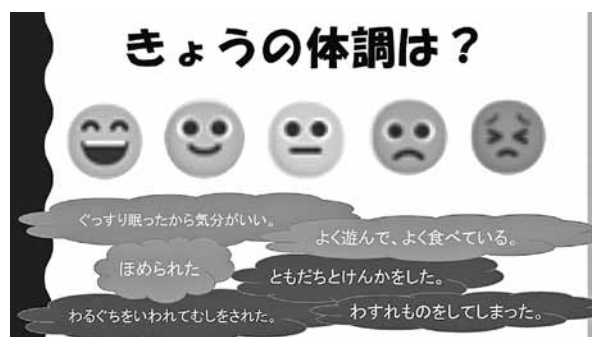


図2「5つのアイコン」

次に、タブレットを使って自分の体調を伝える。Microsoft Teamsのリフレクト機能を使って、表示された5つの表情のうち、今の体調に合ったアイコンを1つ押して、先生に送信する。自閉症傾向の児童や、緘黙傾向の児童も参加することが出来た。また、聞こえづらさにも配慮できた方法だった。

4 おわりに

自分の体調を、先生や友達に伝えられることが大切と思い、授業の最後に取り入れた。

リフレクト機能を使った方法は、難聴の通級がある中学の養護教諭が作り、小学校でも実践してみた。また、ICT支援員の方の援助があり、指導することができた。

指導後のアンケート調査から、健康観察で、児童も教員も、健康状態への興味関心が上がった様子が見られて良かった。今後も、他の教職員の方々と連携しながら、保健指導を進めていきたいと思う。